



在外教育施設派遣教員帰国報告書

～ブラジルでの3年間の生活から～

ブラジル リオデジャネイロ日本人学校の実践

前リオデジャネイロ日本人学校 教諭

北海道帯広市立帯広大空中学校 教諭 新井 英樹

1. ブラジルの概要

(1) ブラジルの国土

ブラジルは、南アメリカに位置する連邦共和制国家である。日本の約2.5倍という南米大陸で最大の面積を誇り、チリとエクアドル以外の全ての南米諸国と国境を接している。27の州を持ち、同じ国内でも、アマゾン川を代表とした広大な自然を有する地域、リオデジャネイロのイパネマ海岸を代表とする美しいビーチを有する世界的な観光都市、サルバドールなどの世界遺産に登録される歴史的建造物を有する都市など、地域によって多種多様な顔を持ち、同じ国内とは思えないほどである。



(2) 「豊かな資源の宝庫」ブラジル

広大な面積を誇るブラジルは、資源の宝庫として世界的な脚光を浴びている国でもある。その代表的なものとして、「海底油田」や「鉱物資源」などがあり、日本を含めた多くの企業がブラジルの豊富な資源を求めてビジネスを展開している。また、広大な土地を利用した大規模な農業国でもあり、郊外にはどこまでも続くサトウキビ畑が広がり、コーヒー、砂糖、バイオエタノールの生産は世界第1位を誇る。

(3) ブラジルの気候

南半球に位置することで、季節が日本の真逆になる。広大な国土のため、同じ国内であっても地域によって様々な気候が見られる。北部に位置するアマゾン流域では典型的な熱帯雨林で年間を通じて高温多湿で蒸し暑い。中央部の高原地帯は比較的雨の少ないサバンナ気候で、その北東部では砂漠も見られる。リオデジャネイロやサンパウロは海岸平野部に位置し亜熱帯気候に属し、南部の地域では冬季には降雪や降霜もみられる場所もある。



(4) 「ブラジル」と言えば、コーヒー！？

「ブラジル」という国名を聞き、多くの人が真っ先にイメージするものが「コーヒー」である。ブラジルは世界の生産量の3割をしめるコーヒー大国であるが、現在は気候の変化の影響もあり、多くの農園がコーヒー栽培を断念している状況もあると聞く。ブラジル人のコーヒーの楽しみ方は、小さなカッ

プに風味の濃い、こくのあるコーヒー（エスプレッソ）を注ぎ、親しい人と長話を楽しみながらゆっくりと飲む。道端には「バール」というカフェテリアが点在し、誰でも気軽にコーヒーや軽食を楽しむことができる。ブラジルには、その暑い気候に対して冷えた「アイスコーヒー」を飲む習慣がない。ブラジル人に、その理由を聞いてみると「日本人が、味噌汁を冷たくして飲まない理由と同じ」という答えが返ってきた。しかし、現在では外資系のコーヒーショップの影響もあり、ブラジル人の中にも、少しずつアイスコーヒーを楽しむ習慣が広がりつつある。



（5）多民族国家ブラジル

17世紀に砂糖や綿花のプランテーションに多くの労働力が必要となったブラジル国家は、世界各国からの移民を受け入れ、アフリカのポルトガル領土から連れてきた黒人奴隷を労働力とした。そのため、ブラジルは多くの人種が混在する「多民族国家」となった。歴史的な背景から色々な人の違いを当たり前のように受け入れ、認めるブラジル人は、とてもおおらかで、誰に対しても「オイ！（こんにちは）」「トゥード・ベン？（元気？）」と気軽に挨拶を交わす。道を歩くと、人種を問わず気軽に話しかけ、道を尋ねたりする姿を見て、最初は驚きを隠せなかった。

2. リオデジャネイロの概要

（1）世界的な観光都市リオデジャネイロ

1960年に首都が移った現在も、リオデジャネイロはブラジルの文化と観光の中心地である。「世界三大美港」の一つとされるガナバラ湾、コパカバーナビーチ、イパネマ海岸、30mのキリスト像が立つコルコバードの丘等々…。毎年、世界各国から、大勢の観光客が訪れる。

（2）「カリオカ」とは…！？

温暖な恵まれた気候と海岸で生まれ育ったリオ・デ・ジャネイロっ子は「カリオカ」と呼ばれ、一般的に明るく陽気で、大らかでおおまかな性格だといわれている。カリオカ独特のポルトガル語の訛りは有名で、ちょうど京都弁のように優しい雰囲気伝わってくる。とにかく、のんびりしている性格なので、何かに追われながら慌てて物事に取り組む雰囲気は、ほとんど見られない。街を歩いていても、前を歩く人を次々に追い越してしまう。スーパーで買い物をすると、いつも長蛇の列が続くが、並ぶ人々もレジを打つ店員も先を急ぐ様子は全く見られない。むしろ、並ぶ人同士で長話をしたりしながら、長蛇の列を楽しむ雰囲気さえ伝わってくる。ブラジルのスーパーには、レジの前にお菓子や飲み物が多数陳列する光景をよく目にする。驚いたことに、それらを飲み食いしながら長時間、順番を待つ人もいるほどである。



(3) ブラジル人も恐れる世界的な犯罪都市

外務省の危険情報「十分に注意してください。」が発令されており、リオデジャネイロは、風光明媚な国際観光都市である反面、世界有数の犯罪都市でもある。州内には約 1,000 箇所のスラム街（ファヴェーラ）があり、組織の力を誇示するため、路線バスの焼き討ち、警察官の殺害、手榴弾の投擲等不法事案を取行している。リオ市内では、車両強盗、一般強盗、引ったくり、空き巣、置き引きなどの犯罪が多い。その背景には、富裕層と貧民層の貧富の差が激しく、貧民層の人々が最低限度の生活をおくることが困難な状況があることが一因として考えられる。赴任者は「自分の身は自分で守る。」ことが求められ、日没後の行動は控える、派手な服装を控えるなど「時刻・場所」を考えて行動することが必要である。



(4) 熱狂的な「カーニバル」

「リオデジャネイロ」といえば、世界的に有名な「リオのカーニバル」が真っ先に思い浮かぶが、毎年2月から3月にかけて、リオデジャネイロだけではなく、ブラジルの多数の地域でカーニバルが開催さ



れ、多くの人々が「世界的なお祭り」を楽しむ。「多くのブラジル人は、カーニバルを楽しむために、一年間一生懸命に働く」とも言われ、毎年2月に入ると、思い思いに仮装した人たちが、賑やかな音楽に合わせて街を踊り歩く姿を目にすることができる。日本でも有名な「リオのカーニバル」は、リオ州にある30余りのサンバチームが専用のスタジアムを使って大きなコンテストで競い合うもので、その「迫力」は言うまでもない。1チームの人数が3000～4000人という大規模なパレード、煌びやかな衣装、製作費が4億円を超えるとも言われる巨大な山車、総勢200人を超えるパテリア（打楽器隊）の糸乱れることのない演奏など、会場に一歩足を踏み入ると、その迫力に誰もが圧倒されてしまう。しかし、安いチケットでも1席2万円ほどかかってしまうカーニバルのパレードを楽しむことができるのは、やはり富裕層の人々に限られ、多くの人々は、街の中を思い思いに踊り歩くことでカーニバルを楽しんでいる。



(5) カリオカとサッカー

「サッカー大国ブラジル」と言われる通り、リオの街を歩いていると、建物の間にある広場、海岸、ビーチ、いろいろな場所でサッカーを楽しむ人々の姿を目にすることができる。リオには、4つの地元サッカーチームがあり、リオに住む人は、それぞれが自分の好きなチームの熱狂的なサポーターになっている。毎週水曜日と土曜日に試合が



開催されるが、応援しているチームのゴールシーンがテレビで放映されると、近隣のマンションから一斉に大きな歓声が聞こえ、花火が何発も打ちあがる。日本企業に勤める方の話では、取引先の人の方の好きなサッカーチームを予めリサーチしておき、そのチームが試合に勝った日に商談を持ちこむようにしているそうである。

3. ブラジルの中の日系社会

(1) 世界最大の日系社会

ブラジルは世界最大の日系人居住地であり、1908年以降の約100年間で13万人の日本人がブラジルに移住し、現在では約150万人の日系人が住むといわれている。世界最大の日系人街があるサンパウロに比べるとリオに住む日系人の数は少ないが、日本人社会のコミュニティーがしっかりと築かれている。ブラジル人の中で日系人は「時間や約束をしっかりと守る勤勉な人種」として、とても高い信用を得ている。そのため、派遣者であっても同じ「日本人」ということで、買い物やアパートの借用の際には、他の外国人と比べて比較的スムーズに契約を結ぶことができる。

(2) 地球の裏側で見る日本の文化

100年前に移住してきた日系人も、現在では2世、3世と世代が移り変わってきているが、彼らが築いてきた日本文化は、現在もなお、着実に受け継がれ、大切にされてきている。現地の食材を利用して作った日本食や和太鼓などを楽しむことができる日本祭や盆踊り大会、日系運動会や野球大会など、1年間に多数の催しが開催され、多数のブラジル人も一緒に参加しながら、日本の文化に親しんでいる。日系人の多くの方は、リオの近郊で農家を営んでいる。入植した当時の話を様々な機会に聞かせていただいたが、かなり過酷な環境の中、試行錯誤を繰り返しながら生活してきた様子が伺える。日系の方にお会いすると、いつも笑顔で迎えてくれる。そして、どの方も本当に優しく親切に接してくれる。まるで、一昔前の日本にタイムスリップしたような感覚に陥ることもある。彼らと接する中、今の日本人が失いつつある「日本人の良さ」を改めて感じ、学ばせてもらう機会も多々あった。地球の裏側で出会った日本の文化は、日々異文化にまみれたブラジルでの生活に大きな安心感を与えてくれた。



4. リオデジャネイロ日本人学校の概要

(1) 学校の歴史

リオデジャネイロ日本人学校は、1960年石川島播磨重工が、イシブラス造船所に派遣された社員の子弟の企業内教育施設（日語補習校）をチジュカに開設したのが始まりである。その後、徐々に日系企業がリオ



デジャネイロに事務所を開設し、日語補習校への入学希望が増加した。その頃から日本人学校設立の気運が高まり、1970年商工会議所内に教育委員会を設置、1971年に日本人子弟教育会を設立し、政府補助も決定、同年8月2日に在リオデジャネイロ日本国総領事館及び進出企業・保護者有志の多大な努力により、リオデジャネイロ日本人学校として設立された。

最初はチジュカの仮校舎で派遣教員2名、現地採用教員5名、児童生徒53名で授業が始められた。1972年にはコスメヴェーリョに新校舎竣工・移転、その後日系の企業進出により生徒数が増加し、1976年現在のサンタテレーザに新校舎竣工・移転した。一時は児童生徒数が400人を超えるときもあったが、その後、児童生徒数が著しく減少し、現在では児童生徒数16名で運営されている。

(2) 「校舎」がない…!?

2010年4月、派遣教員としてリオデジャネイロ日本人学校に赴任した。しかし、奇しくも我々が到着する前日に、リオは記録的な大雨に見舞われ、400人以上の死者を出すという大惨事になっていることを聞いた。さらに、事前に知らされていた「サンタテレーザ」にある校舎は、近隣の貧民街の急激な治安悪化と児童生徒数の減少に伴い、近い将来に売却する方向で動いているという話を聞いた。仮校舎として使用している「日系会館」の施設も、大雨による土砂崩れの被害を受け、しばらく使うことができず、日本総領事館の「文化センター」という施設で始業式を行い、しばらくの間、学校を運営していくことになることを聞かされた。文化センターは、高層ビルの中にある施設で、図書室と会議や講演を行うためのフロアがあり、そこにホワイトボードや教材を少しずつ運びながら、何とか日々の授業や行事をこなす毎日であった。



(2) 仮校舎への移転

6月に入り、土砂崩れの被害を受けた仮校舎「日系会館」が復帰し、2か月間お世話になった文化センターを離れ、日系会館での生活がスタートした。日系会館は、土曜日に行われる現地の日系人を対象と



した「日本語学校」の授業を行うための施設であり、日本語学校が実施されない平日を日本人学校として使用した。日系会館の施設は、グラウンドはなかったが、大きな体育館があり、日本の学校の4分の1程度の広さを持つ教室が6つほどあったことで、当時の児童数6名の環境には十分な広さであった。しかし、理科室、家庭科室といった特別教室がなく、サンタテレーザの校舎に置いたままになっている教材を使うことができないなど、文化センターと変わらず様々な工夫を重ねながら学校運営を進めることとなった。

(3) 世界最小規模の日本人学校

リオデジャネイロ日本人学校は、私が赴任していた3年間、児童生徒数は最少で6人、最大で12人という「世界最小規模の日本人学校」であった。しかし、超少人数であることをメリットに、大規模校で

は実施することができない様々な教育活動を行うことができた。授業では、どの教科においても一人一人の良さやつまずきなど、指導すべき点がよく見え、一つの課題に対して誰がどのように考え、解決していこうとしているかがよく分かり、個々に合わせた指導や支援を行うことができた。体育では、小学部1年生から中学部まで全員で行うことで、デメリット（上学年が下学年に向かって、思い切りボールを投げられない等）もあったが、それ以上に下学年が上学年の真似をして成長できる、上学年が下学年の手本となって面倒を見ることなど、メリットの部分が大きかった。また、それぞれの到達度に合わせた目標を持たせ、複数の教員で支援していくことが可能であり、水泳授業では1シーズンで全員が四泳法の全てを泳げるようになったり、多くの小学部の児童が英検を取得する等、その効果が様々な場で見られた。また、



行事では一人一人の役割が大きく、全員が活躍する機会に恵まれ、個々が様々な行事を通して、確実に力を着け、成長する姿を見ることができた。反面、デメリットとしては、授業で多くの意見を出し合ったり、集団の中で考えさせたりしながら、多様な意見から考えを深めていく機会を作ることが難しい状況があった。特に国語や道徳の授業では、多様な価値観をぶつけ合い切磋琢磨していくような授業を展開しにくく、教員があえて児童役になったりしながら、考えを深めさせるよう授業を工夫することもあった。



（４）現地の特色を生かした教育活動

リオデジャネイロ日本人学校では、小学部1年生から現地の外国人講師による英会話やポルトガル語の授業があるなど、日本の学校では学ぶことのできない授業を受けることができる。また、現地の特色を生かした教育活動を、多くの教科や行事の中で実施することができた。リオタイム（総合的な学習の時間）や生活科の授業では異文化を学ぶ機会として、どの学年も様々なテーマのもと、学習を進めていた。私が担当した小学部の3・4年生では、「ブラジル人の味覚と日本食」というテーマのもと、甘いものが大好きなブラジル人の味覚を調査し、ブラジル人が好む日本食作りに挑戦した。ブラジル人の味覚を調べるためにコーヒーに砂糖を何杯入れるかを調査したり、ブラジル人が好む日本食をアンケート調査したり、日本食レストランに取材に行ったりと、子どもたちと一緒に考えながらたくさんの学習活動を行うことができた。また、現地の人材を活用する学習活動も、全教職員で協力しながら積極的に取り入れた。体育の授業では、ブラジルの伝統的な格闘技「カポエラ」の講師を招いた授業を行ったり、特別活動では、毎年リオのカーニバルにダンサーとして参加している日本人を講師に招き「サンバ教室」を行ったり、子どもたちは多くの場で異文化に触れる機会を持つことができた。現地の特色を生かした学習活動を行うことで、子どもたちは日本との違いや共通点を実体験の中から学び、多くの発見から刺激を受け、学習を深めることができていた。



(5) 理科教師として

リオデジャネイロ日本人学校は、小学部1年生から中学部まですべて教科担任制となっている。私は、小学部の算数と生活科、中学部の技術科、そして全学年の理科を担当した。理科教師として、小学部3年生から中学部までの理科を担当することは、小学校と中学校との関連性や系統性を知ることができるなど、自分自身にとって貴重な体験となった。しかし、国外での理科の授業実践は、様々な困難を克服していかなければならなかった。一つは、教材の不足である。前述の通り、サンタテレザの校舎から仮校舎の日系会館に移転した際に、保管できる場所がないという理由から多くの教材を捨ててしまわなければならなかった。また、郵便事情も悪く、日本からすぐに教材を送ってもらうことも不可能であった。足りな



い教材は、自分の力で入手するか、自作するかしながら準備する以外に方法はなかった。薬品類は、現地のスタッフの方に聞きながらポルトガル語の読み方を調べ、薬局などに出向きながら入手することができた。また、足りない器具は現地の雑貨店や金物店を探し回り、自作しながら準備した。最初の頃はその手間に呆然とすることも多かったが、次第に楽しみながら取り組むことができるようになった。いつしか雑貨店やスーパーマーケットを巡るときには「これは何に使えるかな？」と自然に

教材になりそうなものを探すようになっていた。最初から簡単に準備できる教材を使うよりも、自分で探し、作ることで、授業づくりに大きな達成感と充実感を感じるようになっていた。もう一つの困難は、日本と異なる環境での授業作りである。小学部3年生の「太陽のはたらきをしらべよう」の授業では、教科書で学習する太陽の動きは「東の空から南の空を通り、西に沈む」であるが、南半球に位置するブラジルでは、これが「北の空を通り」に変わる。カリキュラム通りの日時計や遮光板を使った実験や観察は、教科書が示す結果とは異なってしまった。そこで、リオで見られる太陽を使って十分に観察や実験を行った後、学んだ知識を使いながら日本の太陽についてリオと比較しながら考察する授業の展開を考えた。現地で実際に観察した太陽の動きと、日本での事象を比較することによって、共通点や相違点を見出しながら、学習をより深めることができた。また、



小学部4年生の「季節と生き物」では、四季の気温の変化と動植物の成長を関連付けて学習する单元であるが、これも南半球に位置するブラジルでは日本と真逆の季節になるため、教科書に掲載される内容をそのまま扱うことができない。「太陽の動き」と同様に、現地の気温や動植物の変化を十分に調べた後に、日本の事象と比較して考察する学習展開を試みた。結果、子どもたちは、日本もブラジルも気温と動植物の変化に深い関連性があることに気がつくことができた。理科では、実験や観察を通し、実際に自分の目で調べる学習が最も重要であるが、日本とは異なる現地の環境を調べることで、より学習を深める効果があることに気がつくことができた。

(6) 現地団体との交流

リオデジャネイロ日本人学校は、「リオデジャネイロ連邦大学」「アメリカンスクール」「リオデジャネイロ日本語学校」の3つの団体との交流学習を毎年行っている。リオデジャネイロ連邦大学は、リオタイム（総合的な学習の時間）の現地理解学習の内容について、子どもたちからの質問に丁寧に答えてくれたり、調査に協力してくれたりと、リオデジャネイロ日本人学校にとっては欠かすことのできない存在であった。また、体育祭や文化祭などの行事では、日本人学校の子どもたちと一緒に参加し、南中ソーランを子ども達と一緒に踊ったり、演劇を披露したりと、人数の少ない子どもたちのために大いに盛り上げてくれた。アメリカンスクール、リオデジャネイロ日本語学校との交流学習は、普段の授業で子どもたちが学習する英語やポルトガル語を活用する場として役だった。また、交流相手が同年代の子ども達ということもあり、すぐに打ち解けあい、「もっとたくさん話ができるようになりたい」という子ども達の更なる学習意欲を高めるきっかけとなっていた。交流相手の現地三団体にとっても、日本語を学んだり、日本の文化に触れる貴重な機会となっていたようだった。



(7) リオデジャネイロ日本人学校の今後の課題

まず、もっとも大きな課題は学校の「本移転」である。将来的には、環境面でも日本の学校と同等の教育が受けられるように、広いグラウンドやプールのある校舎に本移転する必要がある。リオデジャネイロはインフレによる物価上昇率が毎年約10%あり、不動産はさらに厳しい状況にある。次に「児童数の確保」があげられる。健全な学校運営をするためには、毎年、安定した児童数を確保していく必要がある。しかし、日本人の子弟が近隣のアメリカンスクールに入学するケースも増えてきている。引き続き魅力ある学校作りに努め、子ども達に確実に力を着けていくことで、保護者の理解を得ていく必要がある。また、派遣教員数の削減により、これまでこだわり続けてきた「主要4教科の単式授業」を諦めざるを得なくなった。平成24年度から複式授業を取り入れ、校内研修などを通じてより良い授業の形を研究している。



5. 終わりに

3年前、遠い異国の地であるブラジルに派遣が決まったとき、驚きと不安を隠せなかった。しかし、派遣期間の3年間で振り返ったとき、日本人学校の同僚、同僚の家族、日系人の方々、現地で知り合ったブラジル人、ポルトガル語の家庭教師の先生、マンションの管理人さん等々、本当に多くの方々にも助けられ、支えられながら生活を送り、いつしか自分たち家族にとってかけがえのない存在となっていた。ブラジル人は、親しい友人のことを「アミーゴ」と呼ぶ。日本から遠く離れた地球の裏側で出会うことができた「アミーゴ」たちに、この3年間のすべてを感謝する。オブリガード！（ありがとう）